

2020. 11. 15. 聖霊降臨節第25主日礼拝式説教

ルカ福音書講解説教

聖書：ルカによる福音書15章 8-10節

『見出された銀貨』

ルカによる福音書15章は主イエスのたとえが連続して3つ語られています。ルカによる福音書は5章から始まって、実に多くのたとえが語られています。

しかしその中でもこの15章は、同じような内容を持つたとえが三つ、それも連続して語られている、という点で極めて特徴的です。大事なことはその一つ一つのたとえを丁寧に読むこと、そのうえで三つのたとえを連続して読むことです。ルカはそのことをわたしたちに促しています。

この三つのたとえは同じような内容を持つ、と言いましたが、それは読んですぐにわかることで、「失われる」「見いだされる」「喜ぶ」という話の骨格が共通しているということなのです。

今日の聖書箇所を見ていきます。ドラクメ銀貨十枚持っている女性が一枚銀貨を無くしてしまふ。失ってしまうのです。そこで彼女はともし火をつけ、無くした一枚を捜すのです。ともし火をつけるのは夜だったからではありません。当時の中東の庶民の家にはおおよそ窓というものはありません。だから昼でも暗いのです。彼女は捜すためにともし火をつけて、家探しするのです。さらに箒で家の中を掃く。手の届かないところに箒を入れて、捜すのです。そして彼女は見つけるまで捜すのです。言うまでもなく題材は違うけれど、いなくなった羊を捜すあの羊飼いと同一、見つかるまで捜し続けるのです。

そして、銀貨を見つけたら羊飼いと同一ように、近所の人を呼んで一緒に喜んでくれ、とまで言っているのです。

「失われる」「見いだされる」「喜ぶ」それが今日のわずか2節の短いたとえの中でしっかりと語られています。

たとえを三つ読んでの素朴な疑問は、なぜ同じようなたとえが三つも語られているのか、ということです。それぞれに強調点が違うとか、題材の違いとか細かく言えばいろいろあるにしても、大筋は三つともほぼ同じです。

先週の聖書箇所と今日の聖書箇所を通読して気づくのは、両方とも、たとえ

の最後に「悔い改める一人の罪人については」「一人の罪人が悔い改めれば」とあって、これが悔い改めに関するたとえなのだ、ということが共通して示されているということです。三番目のたとえも、悔い改めに関するたとえであることは、よくわかるのですが、今は置いておいて、前二つのたとえを考えてみます。

確かに主は二つのたとえの後に「悔い改める一人の罪人については」「一人の罪人が悔い改めれば」と語っておられるのですが、改めて不思議な印象を受けます。なぜなら、悔い改めの話だと言いながら、だれも悔い改めていないからです。最初のたとえは羊です。羊が羊飼いに見いだされて悔い改めたとは、どこにも書いていないし、ありえないことです。まして、今日のたとえで見いだされたのは銀貨です。無生物です。悔い改めようもないのです。悔い改めのたとえなのに、だれも悔い改めていない、いや精確には悔い改めることのできないものが題材になっている。そこにどういう意図があるのでしょうか。

まず振り返っておきたいことは、わたしたちはふだん悔い改め、ということはどう受け止めているか、ということです。日本語の辞書を引くと、例えば「今までの自分の行動が悪かった（間違っていた）ことに気づき、それを直すこと、心に誓うこと」「自分の行いやあやまちを、悔いて改める」と出てきます。神から離れてしまって、自分本位に生きている自分に気づいて、それは間違っていた、という自覚を持ち、悔いる。悔いてこれから神の言葉に聞いて神と共に歩もう、と思う。悔い改めなので、ただ悔いるだけでなく、改めるところまで含めて悔い改め、として理解している方が多いのではないかと思います。悔い改めることを、改心と呼ぶ人もいますし、回る心と書いて回心と呼ぶ人もいます。心をあらためるのか、心を神のほうに回す、向き直すという違いなのでしょうが、いずれにしても主体は自分の心です。つまり悔い改めという行動動作の主人は自分なのです。

しかし、ルカ福音書で主イエスが語ろうとしておられる悔い改めは、そういうものではない。もしそういうものであるなら、羊や銀貨をたとえの題材にはしないはずです。動物や無生物ではなく、人間でなくてはならない。しかし主イエスはあえて人間ではない題材で悔い改めのたとえを話された。

悔い改め、という日本語は当事者の心の動き、態度の変化をあらわす言葉であり、わたしたちの中にもそのことはしみ込んでいます。しかしキリストは悔い改めのたとえで敢えて、羊と銀貨のたとえを話された。考えられる理由は一つです。悔い改めとは本人の心の動きや態度の変化ではそもそもない、という理由によるのです。

このたとえば、見つけ出された銀貨が悔い改めた罪人にたとえられています。では銀貨は心の向きを変えるようなことをしたのか、と言えば何もしていない。銀貨はただ転がっていただけです。しかし何の変化もなかったのかと言えば、そうではない。あるのです。それは銀貨が部屋どこかに放置された銀貨から、見出された銀貨になったということです。所有者である女性のもとに戻った銀貨になったということです。銀貨は改心などしていない。心の向きなど変えていない。しかし、この女性に見いだされることによって見出された銀貨になったのです。難しく言えば存在のありようが変わったのです。

主イエス・キリストがここで語る「悔い改め」は、悔いて心を改めようとして、神のほうに向きなおることというような、自分の考え、思いでまず生きることから、神に捜され、神に見いだされ、神の愛のうちに活かされて自分は在るものなのだ、とまず気づかされて生きる、自分の在りようが変わることなのです。「悔い改め」とは自分の心や態度の変化ではなく、見出してくださる神の、イエス・キリストの愛の中にある自分に気づかされていくことなのです。自分という存在は、自分がどこに心に向けようが向けまいが、そんなことにかかわらず、羊飼いの愛の中にある自分なのだ、という発見、気づきなのです。自分がどんな状態であっても、どんな情けない自分であっても、見つけてくださったこの女性の銀貨であることの気づきなのです。

そこでわたしたちは、自分から生きるという生き方から、神の愛の中にある自分を知らされ、気づかされる生き方へと変えられていくのです。それは活かされているということを日々受け取る生活、神の愛から始まる生活と言ってもいい。

心を改める改心、心を神に向きなおす回心、どちらも何らか自分の意思ですることですから、場合によっては達成感があったり、ある種の実感が伴う場合もあるでしょう。しかし、それらはここでキリストが語っている「悔い改め」とは違う。自分からのものであるという点でありようが変わっているわけでは

ないのです。

とても不思議なことに、また興味深いことに、ヨハネによる福音書には「悔い改め」という言葉が一回も出てきません。ヨハネの持っていた伝承にはなかったということなのではないでしょうか。しかしそれならヨハネ福音書では「悔い改め」ということが語られていないか、というとそうではない。むしろ非常はつきりとした形で記されているのです。

それは例えば主イエスのもとにニコデモが訪ねてくる場面です。キリストはニコデモに対して、「人は新たに生まれなければ、神の国を見ることができない」「誰でも水と霊によって生まれなければ、神の国に入ることはできない」神の国を見るとか、神の国に入るということは、神の救いの恵みの中で神と共に生きることであろう。それには、自分の力ではなく、新たに、それは上から生まれなければ、ならないとキリストはここで語っておられる。水と霊とは洗礼とともに、聖霊の働きを指している。

ヨハネ福音書とルカ福音書でキリストが語っておられることは、同質のこと、同じことを別の表現で語っておられる。わたしたちが神さまの救い、恵み、愛の中で生きるのは、わたしの意思や、わたしの改心で起こることではなく、神の上からの働きによるのだ、ということ。どんなに見失われても、見出し、探し出し、喜び、受け入れてくださる神の信実の中に自分があることに気づく、そこからすべてのことは始まっていく、キリストはそう語っておられる。そしてその気づきこそが悔い改めであり、神はその悔い改めをどれほど喜んでくださるか、そうキリストは語っておられるのです。